

これからの農村環境を 考えてみませんか？

はじめに

令和の新時代を迎えても、本町の農業を取り巻く環境は依然として厳しく、農業従事者の高齢化は年々進んでいます。農地の区画が狭く畦畔が広いなど、作業効率が悪い農地が多く存在しており、零細な経営規模の農家が多い傾向にあります。

このような状況の中で、5年後・10年後に本町の農業がどうなるのか、大きな不安を抱えています。

農家全戸アンケート調査

そういつた中で、関係機関(役場山村再生課、農業委員会、JA智頭支店、県ほか)が連携し、平成28年度から問題解決に向けた検討に取り組んでいます。その取組の一環として、平成29年10月に農家全戸アンケート調査を行いました。

農家の経営状況、後継者の有無、今後の経営などについて、

1,343人の農家の皆さんにアンケートをお願いしたところ、約7割(929人)の回答をいただきました。農家の皆さんの関心や危機感が、高い回答率となったものと思われまます。

以下、アンケート結果の大きな傾向を紹介します。

- ・ 農業経営の概況
自己消費が4割と最も多く、販売農家が少ない。
- ・ 後継者の有無
後継者の目処が立っていない人が7割を占める。
- ・ 経営規模の予定
経営拡大の意向のある人は1% (9人)、現状維持は3分の1、規模縮小は1割。やめてしまいたい人や、今後農業は行わない人の割合も少なくなはない。
- ・ 所有農地の貸し借り
最も多かったのが、「当面自分で耕作するので、貸す予定なし」が約半数。

規模拡大を目指す人が少なく、7割の人が後継者の目処が立っていない中で、全農家の半数の

人が「当面は自分で耕作する」ということが、何を意味するのでしょうか？

高齢化が進んで自分では耕作できなくなり、ほかに耕作する人がいなくなったら、その農地は荒れてしまう可能性が高いということではないでしょうか？

集落座談会の開催

アンケートの結果を踏まえ、関係機関で集落に向き、座談会の開催を進めています。

まずは、土師地区において「中山間地域等直接支払制度」の広域組織(石田・木原・長瀬・紺屋土居・横田・三明の6集落で構成)を対象に、平成30年3月から11月にかけて、各集落で順次開催しました

座談会において、「皆さんで集落営農をしましょう!」ということではなく、「うちのムラの田んぼや畑を、これからどうするじゃないか?」という課題について、集落の皆さんと一緒に考えながら、集落での話し合いのきっかけづくりにするための座談会です。

座談会では、想定以上に農家



の悩みは深刻で、現状維持すら難しい事を肌で感じました。

「機械が壊れたら、もう農業をやめる」とか、「息子が定年退職したら継いでくれるだろうか?」、「機械の共同利用は使う順番が難しい」等々、さまざまなお悩みや思いについての発言が数多く出てきます。

一方で、「自分では作れないけど、田んぼの水くらいなら見ることにはできる」とか、「今までムラの寄り合いで田んぼや畑の話をしたことがないけど、これからはするべき」といった、